

流通・施工に携わる皆様とのベスト・パートナーシップで 変革の時代を乗り越える

エクステリア建材事業本部部長
永田 等



あけましておめでとうございます。
21世紀の幕開けは東証株価の一万円割れ、同時多発テロによる国際紛争や世界経済の減速等々、暗い話題に終始した1年間でしたが、年末には皇太子さまの内親王ご誕生というニュースで、ほのぼのとした温かい気持ちに幾分戻ることができたように思えます。

エクステリア需要は幸いにして、前半では前年比102%と比較的堅調に推移いたしました。

しかしながら、確実に減少傾向にあります住宅着工推移を見ますと、高齢化・少子化社会へと変革している事は否めません。

また、単に総量だけでなく住宅取得層の年代や購入方法、更に求められる生活スタイル等、住宅投資そのものに対する価値観が多様化してきていると思われま

す。言い換えれば、長期間にわたるベターな満足感から、遠い先まで解からないまでも今求められるベストな満足感を選択する生活スタイルへ変わりつつあるかに思えます。

そうした時代的変革を踏まえ、単にリフォームという概念ではなく、ゆとりスペースやセキュリティ、パリアフリー、自然との対話、環境共生といった潜在ニーズを的確に捉え、新しい生活スタイルを提案する空間づくりが非常に重要になってきます。

その意味では、これからの時代はますますエクステリアが担う役割は大きいと言えます。

三協アルミでは、皆様と共に、顧客のニーズにより深くお応えし、ご提案できることを第一にソフト・ハードづくりに取り組んでいきたいと思っております。

新しき年を迎え、ニーズ把握に向けた情報交換の場を一層広げてまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

2002年1月

イラスト—前田まゆみ氏

英国コンスタンス・スプライ・フラワー・スクールでフラワーアレンジを学ぶ。同時に、イギリスの庭に影響を受け、趣味でガーデニングをはじめ。その後、自宅で本格的に園芸をはじめイラストを描く。

著書「リトルガーデンブック」マイ・アニバーサリー、「リトルガーデンのしあわせ」、「夢みるガーデンのつくり方」他

表紙...村西恵津子 / イラストレーター・デザイナー
インテリア・生活小物デザイン等幅広く制作活動...2000年九州・沖縄サミットでは、公式贈答品となった扇子の挿し絵を手がける。

INDEX

- 新春ごあいさつ.....1
- ガーデニングセラピー.....2
- 自然庭造り入門.....3
- Uスタイル&メロディアコンテスト入賞作品発表.....4-6
- 設計ノート.....7-10
- スーパー御庭番とくとくキャンペーン.....裏表紙
- 御庭会スタッフ紹介.....裏表紙

私サイズの園芸療法

グロッセ世津子氏

医療施設と園芸療法 Part 1

—癒しの環境となるために—



東和町立西洋風モデルガーデン
ガーデンの向こうに見えるのが県立病院。



ガーデンの近くには、老人保健施設もあり、天気の良い日には散歩に訪れる。



居室の窓からは、かならず中庭が森が見えるように設計されているカナダの高齢者長期療養施設。



居室の窓のすぐ前に植られたベチニアとアジサイ。

重い病気で床につく友人から、ある日電話がありました。「窓の景色がなんと殺風景なので緑が欲しいんだけど、窓から見えるように何か植えてくれないか」という頼みでした。その友人は、都内でも建物が密集している場所に住んでいます。けれども、訪ねる日時を決めたかなく友人は入院してしまいました。病室の窓から見える景色の中にも緑はなく、部屋に飾られたお見舞いの花がころうじて自然の色と息吹を表しています。

私の最初の本「園芸療法」が出版されてまもなくの頃、川口市のあるお医者さんから突然お電話をいただいたことを思い出します。私の本を読んで、あるエピソードをぜひ話したくなったとのこと。エピソードとは、その年の春桜が満開の頃、患者さんが喜ぶかなと思ひ、お友達の庭から枝を切らせてもらって病院に持っていったそうです。するとある糖尿病の患者さんが、熱心に桜に触れたり匂いをかいだりして「本物の桜を見たのは6年ぶりです」と言って涙を流されたということです。つまり、彼はもう6年も入院しているということなのです。そのお医者さんは、ただ軽い思いつきで持ってきた桜にそれほど感動してもらえるとは夢にも思っていなかったのも、とても驚いたと同時に「今まで医者として一体何をやってきたのか」とも思ったそうです。そんな経験があったので、「園芸療法」という本にも飛びついて、病院に庭はないけれど駐車場の緑を考え直そうとのおっしゃっていました。岩手県の東和町で、園芸療法ガーデンを含む町立の西洋風モデルガーデンの設計を主人が頼まれたのは7年前のことです。私も一緒に植物を植えていきました。ガーデンの隣には道路を隔てて県立の病院があります。ある日、面白いことに気がつきました。午後になると、二階の病室の窓際に人影がずらっと並んで、じっと私

たちの作業風景を眺めているようなのです。私たちの働く姿と、日々きれいになっていくのを楽しんでくれているようでした。ガーデンのオープンの前日、中年のご婦人が2人で庭を見にいってしまいました。庭に一步足を踏み入れた瞬間「あー、こんな所におばあちゃんを連れてきたら病気もいっぺんに良くなるね」と話しています。傍にいる私には次のように話されました。「実は母が入院しているんですが、私たち付き添いの者も長くいると気が滅入ってしまうんですよ」。長患いをしてる私の友人のように、寝たきりの人が唯一外の世界とつながっているのが実は窓なんです。窓を通して、目には季節の移り変わり、天気や昼と夜の違い、生き物の動きが、鼻には風や草花や生活の匂いが、耳には風や雨の音や木々の葉のざざめきが入ってくるのです。そして、肌にお日様のぬくもりを感じられるのも窓があるからです。無味乾燥で無機質になりがちな世界にとどまらざるを得ない人にとって、自然や生活を感じられる媒体として、窓から見える景色をもっともっと大切に考えたいものです。園芸療法では、植物を育てる、収穫する、利用するという一連のプロセスを療法のために利用します。これは、園芸療法の能動的部分といえます。けれども、能動的にかかわらなくても植物からの恩恵、つまり癒しを受けることができます。植物は季節を感じさせ、五感を刺激し、生命の循環(ライフサイクル)を優しく伝えてくれます。医療施設の中で、長い間生活から遠のき、限られた関係の中に身を置き、自然に触れる機会がなく、五感にとって乏しい体験しか得られないとしたら、そんな環境が病気の回復に好意的であるはずがありません。園芸療法の受動的部分として、医療施設における庭の果たす大きな役割とデザインについて、次回もう少しお話してみたいと思います。